

令和 四 年度 (A日程)

四天王寺東中学校入学試験問題

国 語

注意 答はすべて解答用紙に書きなさい。
句読点も一字に数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は記号を扱う生き物です。記号には、ひらがなや漢字、アルファベットなどの文字はもちろん、数字や音符おんぶも含まれます。地球上の生き物の中で、記号を駆使くししてコミュニケーションできるのは人間だけ。記号は、長い年月をかけて **カイリョウ** してきた便利な道具なのです。

数字を使えば、「数」を正確に伝えられますし、音符を使えばメロディーも共有できます。言葉を使えば、目の前にない「イメージ」も相手に伝わります。それ以外にも、過去の出来事、未来の予定、人の感情や思考さえも伝達可能です。

では、人間は、記号をどのように処理しているのでしょうか。
実は、記号は、それだけでは伝わりません。

記号が人に届くと、脳は記憶を検索けんさくし始めます。そして、人の脳内でこれまでの知識や経験と、記号とが見事にマッチングできたときには、はじめて「わかった！」となるのです。つまり、こうです。

外からきた「**A**」 || 内にある「**B**」

この処理の途中で、脳内で「絵」を描き上げます。「絵」が鮮明せんめいに描けたときにはじめて「わかった!」と感ずるのです。

たとえば、友達との会話で「昨日、海で犬と遊んだ」という言葉が出てきたとします。

すると、自分の脳内に、海と犬の「絵」が浮かびますよね。

そして、波打ち際ぎわで人間と犬が遊ぶ「**b** **エイゾウ**」になると思います。一方で、「砂浜あなに穴あながあつてさ、その穴から変なのが出てきて……」

といわれたらどうでしょう。

- (1) たしかにこの会話からも、砂浜に穴があいている「絵」は思い浮かびます。
- (2) 記号が補足ほそくされ、くわしい「絵」が描けたところで「へー、わかった!」となるのです。
- (3) しかし、次の「変なの」は難しい。
- (4) 気になるあなたは「変なのって何?」「何色?」「大きさは?」と自分の脳内で「絵」を描くために相手に質問を投げかけるでしょう。
- (5) 「変なの」といわれても、絵を描くことができません。

つまり、「わかりやすい人」とは、相手の脳内にすばやく「絵」を描かせてくれる

人です。逆に、なかなかうまく「絵」を描かせてくれない人が、「わかりにくい人」ということ。その意味では、書店で見かける「よくわかる」「マンガでわかる」というタイトルの本は、脳内にすばやく「絵」を描く手助けをしてくれるのだといえそうです。

ちよつと立場を変えてみましょう。

「なるべく早くお願いね！」

たとえば、あなたが上司からそうやって仕事を頼まれたとします。さて、あなたはこの頼まれごとをいつやりますか。

今すぐ？

数時間後？

明日？

ポイントは上司から伝えられた「なるべく早く」という言葉。

このような **C** 的な言葉はとても厄介やっかいです。すぐに仕上げれば、あなたの評価は上がるかもしれませんが。でも別の仕事を立て込んでいて、すぐに取りかかれない場合もある。上司の「なるべく早く」をどう解釈かいしゃくするか悩みます。

「なるべくだし、少し遅くなっても大丈夫だろう」と後回しにしていたら、数時間後上司から「まだできないのか！ なるべく早くっていったら！」とお小言をもらうかもしれません。上司は「伝えた」と思っているはず。なのに、あなたにはきちんと伝わっていない。

悪いのは上司でしょうか？

それともあなたでしょうか？

もしも上司が「なるべく早く」ではなく、「急ぎの仕事なので3時間後までに頼む」とか「明日の朝までにあればいいよ」とわかりやすくいつてくれれば、あなたが無駄むだに怒おこられることもなかったかもしれません。

あなたが少しだけ気を利かせて「夕方で大丈夫ですか？」と確認しておけば違った結果になったかもしれません。

「伝えた」と「伝わった」問題は① **こんな厄介なやりとりになりえるのです。**

美術の世界でも、抽象画ちゆうしやうがを理解するにはある程度の知識が必要ですよね。脳内の絵を抽象画にしてしまうと、わかりやすさが失われてしまうのです。

上司と部下、同僚どうりやう、友達、夫婦。多くの人たちは、仕事やプライベートでコミュニケーションを必要としています。会話や文章で、自分の思いをわかりやすく伝えるこ

とができれば、コミュニケーションはもつとスムーズになります。

それにはやはり、相手の脳内に絵を上手に描かせることにつきます。

では、② 上手に絵を描いてもらうコツは？

あなたは「自分の伝えたいことは、相手に確実に伝わる」と思っていますか。しかし、そう思うのは危険です。

「自分の話は伝わる」と思って相手に接すると③ 自分本位の話し方になりがちです。そして、もし相手に伝わらなかった場合、

「なんで俺おれのいっていることがわからないんだ！」

と、怒りを覚えてしまうかもしれません。

一方、「伝わらない」を前提ぜんていにすると「どうしたら伝わるだろう？」と相手の顔を思い浮かべるはずです。

たとえばあなたが友達に「お店の場所、教えて！」といわれたら、道順を説明できますか。自分の頭の中に「店までの地図」を描き、それを相手に説明することになります。街の風景は固定されたものですが、人によって注目するポイントが。コトことなります。

あなたが道順を説明するときは、自分の「地図」を使いながら、相手の頭の中に「地図」を描かせなければいけません。

何を d メジルシ とするのか。どんな道順がいいのか。

相手の顔を思い浮かべることは、わかりやすさのトレーニングにもなるでしょう。

これは一般的に「他者意識」といわれています。

他者を意識する、つまり「伝える相手」が見えてくるとどんな言葉を使えばいいか、どんな話し方をすればいいか考えるようになります。

伝える相手を意識する。これがわかりやすい話し方の、スタートになるのです。

伝える相手に「わかりやすい！」と思ってもらうには、④ 相手の脳内に上手に「絵」を描かせることでした。

他者意識を持つと、相手の得意な絵の描き方が、自然と見えてきます。すると、相手の描き方をサポートすることができるようになります。

どういうことでしょうか。サポートとは、相手の頭の中にある言葉、つまり知っている言葉で伝えることです。相手の頭の中のない言葉を使う時点で、わかりやすさの視点で見ると、アウトなのです。

小学校で習う言葉、e 平易な言葉を「e コドモ言葉」と名付けましょう。コドモ言葉は、知っている人が多い分、わかりやすくなるのはたしかです。

しかし、すべてをコードモ言葉にして伝えればいいのかといえ、そうともいえません。目的は相手の頭の中に「絵」を描かせることですよね。そのためには、コードモ言葉よりも、難しい専門用語のほうが理解の早い人もいるかもしれません。

相手が普段使う言葉⇨相手の頭の中にある言葉なので **D**。人によって違うのです。ある人は専門用語かもしれませんが。ある人は流行り言葉かもしれませんが。ある人はアニメのセリフかもしれません。

つまり、言葉の選び方は相手次第。伝える相手にとっての「わかりやすい言葉」を使うことこそ、わかりやすさの基本ルールと覚えてください。

(竹内薫『教養バカ わかりやすく説明できる人だけが生き残る』より 一部改)

問1 〓線 a s e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問2 **A**・**B**に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| ア | A | 記号 | B | 記憶 |
| イ | A | 経験 | B | 記号 |
| ウ | A | 知識 | B | 記号 |
| エ | A | 記号 | B | 道具 |

問3 文章中の **□** の(1)～(5)の文章を正しい順番に並べ替えているものとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----------------|---|-----------------|---|-----------------|---|-----------------|
| ア | (1)(5)(4)(3)(2) | イ | (3)(4)(5)(1)(2) | ウ | (1)(3)(5)(4)(2) | エ | (3)(1)(5)(2)(4) |
|---|-----------------|---|-----------------|---|-----------------|---|-----------------|

問4 **C**に入る語として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 具体 イ 抽象 ちゅうしょう ウ 直接 エ 間接

問5 〓線①「こんな厄介なやりとり」とは、どのようなやりとりのことですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|----------------------------------|
| ア | 伝える側と受ける側が自分の言うことを正しいと思うようなやりとり。 |
| イ | 伝える側と受ける側の間に食い違いが起こってしまうようなやりとり。 |
| ウ | 受ける側に言ったことを伝える側が忘れてしまうようなやりとり。 |
| エ | 受ける側に言われたことを伝える側が確認しないようなやりとり。 |

問6 ——線②「上手に絵を描いてもらうコツ」とはどのようなものですか。「〜こと」に続くように、本文中より十字で抜き出しなさい。

問7 ——線③「自分本位の話し方」に当てはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の話しやすいスピードで話す。
- イ 自分の使い慣れた言葉を使って話す。
- ウ 自分にとって都合のよい順番に話す。
- エ 相手の話を否定して、自分ばかり話す。
- オ 自分の話が伝わっているか意識して話す。

問8 ——線④「相手の脳内に上手に『絵』を描かせること」とはどういうことですか。ここより後から二十字以上、二十五字以内で探し、初めの五字を答えなさい。

問9 次の二つの四字熟語は D に入るものです。() にそれぞれ漢数字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

- () 差 () 別
- () 人 () 色

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の「僕ぼく（太一）」は、母親の死をきっかけに、父と妹の「菜月なつき」と一緒に母親の生まれ育った街に引っ越してきた。

店の奥おくは、児童書のコーナーだった。菜月に何か買って帰ってあげよう。「①前」には、彼女はよく児童書のコーナーで目を輝かがやかせてあれこれ手を伸ばのしていた。今はきつとそんな力もない。僕は知っている。彼女が毎晩蒲団ふとんの中で泣いて、声を殺して泣いて、やがて泣き疲つかれて眠ねむるのを。菜月のくぐもった嗚咽おえっが聞こえてくると、僕はやりきれない気持ちになる。かわいそうだと思うし、自分のことがかわいそうにも思えるし、何より母さんのことがかわいそうにも思えてきて、もう何をかわいそうがつていいのかさえわからなくなった。

ふと顔を上げると、棚たなの向こうから、女の子がこちらを覗のぞいていた。

目が合って、あわてて逸そらした。なつかしいような顔だった。②心臓ちががどくどく音を立たてていた。同じ学校の子だろうか、と思ったけれど、すぐに違ちがうと気づいた。制

服が違う。でも、同じ歳くらいだと思う。もう一度、そつと顔を上げると、彼女もこちらを見た。またすぐに視線を落とす。目が合うのがはずかしくて、彼女を見ていることが知られるだけでもはずかしくて、それなのに気になってまた見てしまう。

この感情が何なのか、僕にはわからなかった。彼女の姿を見たくて、本を選んでいふりをしながら何度も様子を窺った。彼女は手に持っていた本を棚に戻すと、最後に一度こちらを振り返ってから、その場を離れた。

彼女が見ていた棚のところに行ってみる。どの本を見ていたのか探してみる。これかな、と手に取って、戻して、もう一度手に取って、それから考え直す。もしかしてあの子がここに戻ってきたら。僕が持っているところを見られるのはとてつもなくはずかしい。

やっぱ戻そう。そう思った瞬間、彼女がそこに立っていた。

「それ、おもしろいよ」

何もいえずに突っ立っている間に、彼女はにっこり笑って、今度こそほんとうに店を出て行ってしまった。

僕はその本を買った。

それが火曜日だった。金曜に、また本屋へ行った。期待せずに店に入ると、こないだと同じ場所に彼女が立っていた。

「こないだは、ありがとう」

僕は勇気を振り絞ってお礼をいった。

「本を読んだのは、すごく久しぶりだった」

口になると、それがどんなに大きなことかがわかった。本が好きだったのに、そんなことすら忘れていた。

「もしも、あの本が気に入ったのなら」

彼女は棚のほうを向き、ちよつと時間をかけて何冊か選んだ。それを僕に手渡すと、しっかりと目を見て微笑んだ。笑顔の意味はわからない。でも、心臓が早鐘を打っていた。彼女が店を出ていくと、僕はお小遣いをはたいて、四冊全部を買った。

次に会ったのは、翌週の月曜だった。

「もう全部読んだの？」

彼女はうれしそうに笑った。うーん、じゃあ、今度はどうしようかなあ、などといながら棚の間をまわってゆく。僕も一緒に歩いた。どんな本が好きかぼつぼつと話しながら店内を一周すると、彼女の腕には何冊かの本が抱えられていた。文庫が三冊にハードカバーが一冊。ハードカバーか。お年玉からお金をもってきたから、買えないわけじゃない。だけど、③ちよつと困った。

「これ、女ものじゃない？」

「女ものって」

彼女は首を振って笑った。ふと、どこかでこんな笑い方をするひとを見たことがある、という思いが頭をかすめた。

「洋服じゃないんだから、本に男ものも女ものもないと思うよ。でも、もしも気に入らなかったら、妹さんにでもあげて」

そうか、妹にか、と思うのとはほぼ同時に疑問が浮かんだ。妹がいることを話したっけ。話していない、と瞬時に思う。妹のことを話す暇ひまはなかった。妹に限らず、家族のことは話していなかった。だって家族の話をしたら、母さんのことを話さなければならなくなってしまう。

でも、目の前にいる彼女が弾はずんだ声で話すので、僕の心は浮うき立った。④ 浮うかんだ疑問はゆらゆらつとどこかへ消えてしまった。

どうして彼女からはこんなになつかしい匂においがするんだろう。彼女の横顔をこっそりと盗ぬすみ見ながら考えた。なつかしさがどんな成分でできているのか知らないけれど、うれしいとか、よろこばしい、たのしい、⑤ な気持ちに、せつない、はずかしい、といった身を縮めたくなるような感情も混じっているのだと思う。少なくとも、僕には、彼女になつかしさを感じてしまったことに対する妙な後ろめたさがあった。

このあと、本屋を出た僕が彼女に名前を聞くと、彼女は「中村」と名乗った。僕はそれからしばらくの間、本屋を訪れることができなくなった。

日曜に、ようやく本屋へ行くことができた。

彼女がいると思ったわけじゃない。むしろ、いなくて当然だと思った。でも、文庫の棚の前に、あのなつかしい姿がなかったとき、僕はやっぱり落胆らくたんした。

あ。また「⑥」と思った。この辺のひとの顔はみんななんとなく似ている。そうつぶやいた父さんの言葉を思い出している。

そうか。謎なぞが解けた気がした。彼女はこの辺のひとの顔をしている。つまり、母さんどことなく似ているのだ。だから、惹ひかれた。恋こいとか愛とかじゃなく、本能的に惹かれたのだと思う。

「こんにちは」

背後で声がして、振り向いた。

彼女だった。

僕はその顔を見て、すぐに目を逸らした。どきどきしていた。たしかに、似ていた。みんな似ている、その範疇はんちゆうを少し超こえているような気がした。

「……こんにちは」

彼女の目を見ずに軽く頭を下げる。

「ちよつと久しぶりだったね」

微笑んでいるかのようなやわらかな声が、僕の身体に染み込んでくる。その声までも、似ている、気がした。

「どうかした？」

彼女がいった。僕は黙って首を横に振った。彼女も黙った。目を見合わせないで、ふたりで立っていた。

「読んだよ、重松清」

僕がいうと、彼女はほっとしたように表情を崩した。

『流星ワゴン』が今のところ一番好きだ」

「ああ、よかった」

「それから、『きみの友だち』。『再会』も」

彼女は⑦ちよつと声のトーンを上げた。

「そんなに読んだの？ こんな短い間に？」

僕はうなずいた。お小遣いではすべては買えないから、学校の図書室から借りたものも混じっている。

「かあちゃん」

「……え？」

僕は顔を上げ、真正面から彼女を見た。

『かあちゃん』っていう本もすごくよかった」

半分、嘘だ。すごくよかったけれど、半分までしか読んでいない。いろんな「かあちゃん」が出てきて、涙で最後まで読み通すことができなかった。

「あれから考えたんだけど」

中村さんは『かあちゃん』には触れずに話題を変えた。

「新しいおすすめの本。たぶん、小説は重松清から広げていけると思うから。もし興味があったら、の新ジャンル」

うん、とうなずくと、彼女は先に立って歩き出した。背格好も似ている。女の子と
いうのは、中学生くらいで身長が伸び止まってしまふのだろうか。

彼女に連れていかれたのは、意外な棚だった。

「何、これ、どうして。僕に？」

料理の本が並んでいる。初めての料理。和食の基礎。スープの本。本場のパスタをおいしくつくるには。

「案外、お料理の本って読んでると楽しいのよ」

彼女はくすくす笑った。それから、真顔になって付け足した。

「いつか必ず役に立つから。ご家族のためにも」

ご家族。やけに大人びたい方だった。彼女は知っているのだ。僕の「ご家族」か

ら大切なひとりが欠けてしまったこと。今度は僕が「ご家族」のためにがんばるときだということ。

落ち着いた表情で僕を見ている彼女に向き直った。

「ありがとうございます。読んでみるよ」

そういうのが精いっぱいだった。

家に、母さんの使っていた料理の本が何冊もあったはずだ。あれを読んで、何かつくってみよう。母さんほどうまくはつくれないに決まっているけど、「ご家族」のために、何か、おいしいものを。

⑧

おそろおそろ聞いてみた。彼女は目を伏せた。

「あたりまえじゃない。母さんはもちろん太一の家族でしょう」

顔は穏やかだったが、語尾が震えた。

「中村さん」

名前はなんていうの。その見かけない制服はこの学校のものなの。

何も聞けなかった。⑨聞かなくても知っていた。家に帰って、おばあちゃんに古いアルバムを借りればわかることだと思った。

「ありがとう」

はっきりと、しっかりと、⑩伝わるように祈りながら僕はいった。彼女はにこにこと笑った。いつもそうしていたみたいに、小さく首を振って。

「こちらこそ」

涙でかすんだ目を上げると、彼女はもういなかった。

(宮下奈都『なつかしいひと』より)

問1 —— 線①「前」とありますが、何の「前」ですか。答えなさい。

問2 —— 線②「心臓がどくどく音を立てていた」と同じ状態を表す言葉を、本文中より十一字で抜き出さない。

問3 —— 線③「ちよつと困った」とありますが、その理由として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼女が選んだ本が、僕が好きだと話した内容とはまったく違っていたから。

イ 彼女が選んだ本が、お年玉でやっと買えるくらいの高価なものだったから。

ウ 彼女が選んだ本が、女の子が好んで読みそうな内容のものだったから。

エ 彼女が選んだ本が、妹の好みに合うものかどうかわからなかったから。

問 4 — 線④「浮かんだ疑問」とありますが、どのような疑問ですか。一文で抜き出し、初めの五字を答えなさい。

問 5 ⑤に当てはまる言葉として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 論理的 イ 客観的 ウ 消極的 エ 肯定的

問 6 ⑥に当てはまる言葉を本文中より五字で抜き出しなさい。

問 7 — 線⑦「ちよつと声のトーンを上げた」とありますが、ここには「彼女」のどのような感情が表れていますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 緊張 イ 感嘆 ウ 立腹 エ 満足

問 8 ⑧に当てはまる言葉として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 僕にも、おいしい料理が作れるかな
イ 母さんは、料理が楽しかったのかな
ウ ご家族って、父さんと妹のことかな
エ ご家族に、母さんは含まれるのかな

問 9 — 線⑨「聞かなくても知っていた」とありますが、「僕」はどのようなことを知っていたのですか。十五字以上二十字以内で答えなさい。

問 10 — 線⑩「伝わるように祈りながら僕はいった」とありますが、どのようなことを伝えたかったのですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 偶然出会った「僕」が母親を亡くして落ち込んでいることを見抜き、見ず知らずの「僕」の気持ちを気づかっってはげましてくれたことへの感謝。

イ 「僕」が今まで読んでこなかったジャンルの本をすすめてくれただけではなく、料理という新しい趣味まであたえてくれたことへの感謝。

ウ 母を亡くしてから忘れていた本を読む楽しさを思い出させてくれ、今は「僕」が家族を支えていくときだと気づかせてくれたことへの感謝。

エ 「僕」と同じ歳ぐらいなのにやけに大人びた言葉を使ったり、料理の本を教えてくれたりして、母親の代わりようになってくれたことへの感謝。

三 次の問いに答えなさい。

問1 ①～⑧の空らん当てはまるものの名前を後から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① () も歩けば棒に当たる。
- ② () の耳に念仏。
- ③ 泣きつ面に () 。
- ④ () の顔も三度まで。
- ⑤ () も木から落ちる。
- ⑥ 立つ () 跡をにごさず。
- ⑦ 飛んで火にいる夏の () 。
- ⑧ 渡る世間に () はなし。

ア	さる	イ	むし	ウ	とり	エ	さかな	オ	はち
カ	たぬき	キ	うま	ク	いぬ	ケ	ほとけ	コ	おに

問2 次のア～オの文章の中のことわざの使い方として正しいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア リスクはあるかもしれないが、虎穴に入らずんば虎兇を得ずというし、挑戦してみようと思う。
- イ 枯れ木も山のにぎわいですので、ぜひ今度のパーティーには皆さんでお越しください。
- ウ 多くの支払いをして、手に入れたのがほんのわずかななんて、まさに海老で鯛を釣るような話だ。
- エ さすが餅は餅屋だね。こんなに美味しいケーキが作れるなんてパティシエならではだ。
- オ 天気予報の通りに、激しい雨が降ってきた。まさにひょうたんから駒が出るようだ。